

報



會

會 岳 山 本 日

21

月 二 十 年 七 和 昭

高山登攀と酸素と

渡邊 漸

一八五五年にシェラーギントワイ
トがカメットに於て約二萬呎に達し
て以來、約八十年にしてその高さを
ば更に八千呎だけ高める事を得たが
人類にはまだ最後の一千呎だけが残
されて居る。八十年に八千呎である
から十年に平均一千呎だけ高められ
た事になる。されば一九二四年から
約十年を経過した來るべき一九三三
年の試みに於てエヴェレストの頂
が極められて、わけであるし、
また一九二四年の経験よりして次の
機會に於ては當然その頂が極めら
るべき確信を萬人等しく抱いて居る
のが今日の情勢なのである。

この大勢に抗して、來るべき登攀
に於てエヴェレストの頂が依然と
して、人類の征服感を満足せしめな
いであらうと自分は考へ度い。

スマイスのカメット登頂に依つて

山岳人の慾求の一部は充された、然
かしこれと共に吾々の自然に對する
増長心も成長したであらう、エヴェ
レスト何物ぞの考へは恐らくはスマ
イスのみならず多くの人々に依つて
抱かれて居るに違ひあるまい。斯る
増長心をこれ以上つけ上らせないが
爲に、不可登の頂が、否、人類に
依つて達する事の出来ない高さが存
在してもいいではなからうか？そ
してこの容易に達し難い高さへと、
登山者が絶えざる努力を續ける事
の方が寧ろ望ましい事ではなからう
か？これは一面から見れば感傷的

な、餘り根據のない自分一個の主觀
的な考へ方である。然かしもう一つ
他に客觀的に嚴存する事實がある。
それは高距の増加とこれに要する仕
事の量、或は言葉を変へて言へば努
力とが正比例しない事である。

即ち高さが高くなるに従つてこれ
に要する努力は等差級数的に非らず
して寧ろ等比級数的に増加する事
實である。最後の残された一千呎は
單なる一千呎ではない、八十年掛つ
て築き上げた八千呎より更に困難な
る事實である。科學上の見地からし
てエヴェレストが人間に達し得られ
るか否かの境界にあるのは、偶然の
一致とは言ふものの、興味ある事實で
ある。此處に科學的と言ふのは、密
閉した稀薄なる空氣を有する實驗室
内の成績ではない。エヴェレスト頂
上の氣壓より更に低い一七〇耗に在
つても尚、酸素を吸入すれば人間は
生きて行く事が出來、然かも斯る低
壓に在つて一定の運動さへ行ふ事が
出来るさうだがこれは登山者にその
儘適用は出來ない。

然かし馴化のみに依つてエヴェレ
ストの頂は達し得られるので、科
學的の立場は探るに足らないとする
ヤンクハズバンドを主唱者とするア
ルバイン・クラフの長老者の意見を
その儘、受け容れる勇氣も自分は持
合はして居ない。科學的考察と馴化
との二つは同程度に考慮せられれば
なるまい。一九二四年の成果は酸素
派の敗亡を齎したが、果して馴化の
一枚看板のみに依つて其最後の一千
呎が切抜け得られるであらうか？
彼等の言ふ所は之れまで到底達し得
られないと考へられた二萬八千呎の

高さが馴化のみに依つて達し得られ
た、然らば残りの一千呎が馴化に依
つて達し得られない理由はないと言
ふのだ。處がその最後の一千呎なる
ものは只の曲者ではない。完全なる
馴化を獲得したノルトンやソマーヴ
エルでさえ二萬八千呎に於てその一
歩を擧ぐるに如何に困難を極めたか
斯る困難が更に加速度的に増加す
る最後の一千呎は酸素の助けを借り
ずしては到底達し得られないであら
う。然かも充分なる酸素を携へたに
してもこの一千呎が一気に突破され
る事は望み難い。改良せられた最輕
量(約二貫目)の酸素吸入裝置を以
てしても二時間半を支うるに過ぎな
い。マロリー及びアヴィン等の例よ
り見ても酸素を用ゐても尚その進行
は遅々たるものであるとせば、少く
も五時間登りに要し下降に際して
登攀時の半分の酸素を要するとして
約六貫目となる。これは餘りに大き
い負擔である。どうしても二萬八千
五百呎の邊りに酸素のデポを豫め
用意し、露營點として實際に可能性
ある最高點たる二萬八千呎の最後の
キャンプから出發し、途中酸素の中
繼を行ふてどうか目的が達し得ら
れるのではあるまいか？然かも最
高キャンプを二萬八千呎に置く事が
甚だしく日數と努力とを要し、睡眠
及び食事中には酸素の吸入が不可能
とすれば、この事だけでさへ可成困
難な事で、これに加ふるに酸素の中
繼等といふ面倒な事が實際に出來る
かどうかを疑へば、どうもエヴェレ
ストの頂がさう容易く人類の足下
に降る事はあるまいと考へられる。

目 次

- ★高山登攀と酸素と(巻頭).....渡邊 漸(一)
- ★マンメリーの最期を憶ふ(凸版入).....藤島敏男(二)
- ★研究欄アルコールコンロ(凸版入).....初見一雄(五)
- ★穂高湖潭の山小屋建設豫定地に
ついて(寫眞版入).....(七)
- ★第五十七回小集會記事
一、クル溪谷 二、朝鮮集仙峰(七)
- ★關東學生登山聯盟解散聲明書.....(六)
- ★今冬の山小屋調査.....(八)
- ★山日記讀者寸評.....(八)
- ★圖書紹介.....(八)
- ★秋風帳(柳田國男著).....(九)
- ★山想日記(文獻堂).....(一〇)
- ★日本山岳會々員學生有志晚餐會.....(三)
- ★山岳會追補と新設.....(六)
- ★鳴川の小屋.....(七)
- ★陸地測量部新刊目錄.....(一〇)
- ★本會事務所移轉.....(二)
- ★會務報告.....(二)
- ★定例理事會、新入會員、退會者
新着圖書、山小屋委員會
- ★編輯後記.....(三)
- ★投稿規定.....(三)

マンメリーの最期を憶ふ

藤 島 敏 男

それは今を距る三十八年、一八九五年のことである。

この地上の樂園といはれる印度カシミール高原の首都、水の町スリナガルから北方の天際に白銀造りの王冠のやうに望まれるヒマラヤの巨峰、世界第七位の高峰ナンガ・パルバットの北面に於て、近世登山史上比喩なき天才と謂はれる、アルバート・フレデリック・マンメリーが戦國時代の梟雄のやうな華々しい生涯を斷つたのはこの年の八月である。

彼マンメリーが二人の山友ノルマン・コリー、ジョフリー・ヘステインクスと共にナンガ・パルバットの麓にやつて来たのは七月のなかばであつた。天候と戦ひながら、またヒマラヤへの登山者の誰しもが経験するボーターの操縦に慣みながら、或は西南面から、或は西北面からこの巨峰の顔への登路を見出すべく苦闘を續けてゐる内に、一月ばかりの日は惶だしく過ぎてしまつた。

八月十八日から二十日に亘る三日間、屈強なボーター一人を伴つてナンガパルバットの西北面に彼が試みた登攀は、異常な困難に打克て二萬呎を超ゆる高度にまで達し、その地点から二萬六千六百二十九呎の最高點までの最後の六千呎の登高には餘

り大した危険も困難も横たはつてゐないといふことを確め得たにも拘はらず、ボーターが更に高くへの登行に堪へられなくなつてしまつたので涙を呑んで引返すの己むなきに至つたのであつた。その後の二日間は一

行の間に今後の行動が論議されたがマンメリーは西北面からの突撃を中止することを主張し、最近降雪のあつたことから、雪に蔽はれた斜面を選ぶことが最も登頂の可能性あるものと推定し、それがためにはさらに東方に轉じて、西北面よりも幾分容易と想像される北面から最後の登攀を試みることに一決したのである。

然し東方に轉ずるにも二萬呎に近い鞍部を越えなければならなかつた。二十三日の朝マンメリーは二人のボーターを伴つてコリー、ヘステインクスに別れを告げ、新たな希望と闘志に燃えながら氷河に蔽はれた鞍部へと登つていつた。この日最も強力な二人のケルカ人は曩にマンメリーが西北面の試登から退却を餘儀なくされたときに、放置してきたルツクサツクを持歸へるべく派遣され夕刻にはマンメリーの一行と氷河の上方に於て邂逅し、ボーターに代つてマンメリーに従ふことになつてゐた。

二
コリーとヘステインクスはアイアミライ氷河のベース・キャンプを引拂つて北方に迂迴し、アイアマ氷河からラキオット氷河へと、アイアマ・パスを越えていつたマンメリーの一行に出會ふべく先きをいそいだしかしそれも容易な行路ではなかつた。一萬六千呎に達するレッド・パスを越え、さらにいくつかの大きな山稜の登降が要求された。それに八月も終はりに近くなつて天候も崩れてきたのであらう、激しい雨や深い霧が未知の山谷を辿る彼等を妙からず惱まし、三日目に再び一萬六千五百呎に及ぶ鞍部を越えて漸くラキオット氷河に達することが出来たのである。鞍部からは暴風雨の後の荒涼たるラキオット氷河が瞰下され高く高く空際にパルバットの北壁が仰がれた。そして氷河への下りからはマンメリーが越え來るべきアイアマ・パス東北面の巨大な氷壁が望まれたそれは人間の能力を以てしては如何

とも爲す術なしと思はれるやうな險惡な形相を呈してゐた。驟雨のそぼ降る中で天幕は張られた。

コリーは強力な望遠鏡を持ち出してその巨大氷壁の何處かにステツプを切つた跡があるかと限なく探求したのであるが、人間の跡は全くどこにも見出されなかつた。けれどもコリーもヘステインクスもマンメリーが「單なる峠越へに於て危険を冒す

事務所移轉通知

東京市芝區琴平町

一番地五號

不二屋ビル 三〇七號

日本山岳會

振替東京四八二九番

昭和八年一月一日より、從來の芝區高輪南町三〇番地の本會事務所を右の通り移轉致します
依つて本會宛一切の通信は右へ願ひます。

やうなことはしない、アイアマ・パスを越すに當つても非常な危険や困難に遭遇すれば引返して来る」と言つた言葉から彼が元へ引返したものと堅く信じて疑はなかつた。またその爲にマンメリーは餘分の食糧をパスの手前の天幕に残してゆくことになつてゐた。恐らく彼はその食糧を持つてコリー達の後を越つてくるものと想像したのである。しかし萬

全を期するために二人のボーターは補給の食物を持つて、ベース・キャンプからの足跡を辿つてマンメリーを迎ふべく派遣された。

それから二日といふものは濕潤不快な陰鬱な天候が続いた。ボーターのたよりを齎すのを凝乎待つてゐるコリーとヘステインクスの心にも何とない不安の念が萌してきた。三日目になつてボーターは歸つてきたが、マンメリーには會はないといふ。愈々何等かの方法を講ずるの必要に迫られて來た。

かうなつても二人の山友はまだマンメリーの死を想像しなかつた。アイアマ・パスから引返して自分達の後を追ふ内、深い霧のため進路を誤つたか、或は彼が裸でも捻挫してまだアイアミライのキャンプに留つてゐるかのいづれかであると推測したので。茲に於てヘステインクスはアイアミライ氷河のベース・キャンプのあつた所へと引返し、コリーはどうしても九月の末までに英本國に歸着する必要上一人のボーターとクツクを伴つて、北東インダス川の支流アストール峡谷の町アストールに出で、其處にヘステインクスからの報道を待つことになつた。

一方アイアミライ氷河に引返したヘステインクスは曩にマンメリーの伴つた二人のボーターと共にアイアマ氷河を過り九月一日ナンガ・パルバット直下のハイ・キャンプに到達したのであるが、其處に發見されたものは何か？！

天幕も食料もその他の物も、總てが八月二十四日の朝マンメリーと、

二人のケルカが出発したときの儘に遺されて、其後何人も此處に立戻つた形跡は見出されなかつたのだ。天才的登山家マンメリーと強剛にして勇敢なる二人のケルカ人との死は最早疑ふ餘地なきに至つた。

急使は北方インダス川に沿ふ街道の電信局に派遣され、悲しき報道はアストールなるコリーの許に電送されたのである。

九月五日この悲報を手にしたコリーは取るものも取り敢へず、引返し来るヘステインクスに出会ふべくアストールを出發した。この間駐在士官を通じてナンガ・バルバット南北の峡谷の土民に對し搜索應援に出動すべく命令が發せられた。六日ドイアンに於て二人は邂逅したのであるが相語るべき言葉もなかつたといふ過去に於て多くの山行を共にし、いくつかの輝かしい記録をうち立ててきた、何物にも代へ難い親しき山友の死に直面して最大の悲愁に傷む心を抱くコリーとヘステインクスが再びナンガ・バルバットの北麓デミアイミ水河のほとりへと登つてきたのは、九月もなかば十六日であつた。僅か一月の間にこれはなんといふ變りやうであらう。咲き誇つてゐた野生の薔薇は、花はもとより一葉も残してゐない、川場は枯木のやうになつて峰から吹風す寒風に悲しげにうごめいてゐる、石楠花の上には雪が積んでゐる、そこにはもう冬がやつてきてゐるのだ。二人は尺餘の新雪を踏んでハイ・キャンプまで登つた。そこには依然として天幕食料が在りし日のまゝに残されてあ

つた。ハイ・キャンプから上方への搜索は新雪のため殆んど不可能であつた。しかし彼等は更に五百呎あまりに登つてマンメリーと二人のケルカの埋れてゐるであらう溪谷を俯瞰し最後の訣別を告げたのである。

三

ノルマン・コリーがその著に書き誌してゐるやうに「およそ登山者の内に、印度の地圖を手にして一度はヒマラヤを訪れる機會に恵まれたものの願望を持たぬものがあらうか？カンチエンジャヤンガ、マカル、ナンダ・デワイ、ナンガ・バルバット、或は其他の幾百を以て數ふる雪に蔽はれし山々、その何れもが他の大陸の最高峰を抜く之等の山々を見たい

と願はぬものがあらうか？ 彼には牧草とヒマラヤ松とが日光にその縁を輝かせ、高みには白き山々の間に巨大な氷河が凍結した河のやうに横たはつてゐる、熱帯植物の繁茂する溪谷を通つてその高い處まで彷徨ひ歩くことを願はぬものがあらうか？すべて自然のスケールの大きい國、大きな河と力強い山の國、鳥や動物までが大きい國西歐尙ほ未開の状態にありし數世紀の昔既に文明の民の住ひせる國に旅行したいと願はぬものがあらうか？」恐らくそれを願はぬ登山者はあるまい。

マンメリーも亦ヒマラヤに強く心を惹かれた一人であつた。

印度政府からナンガ・バルバットを含む地方への登山に對する許可が

得られたならば出掛けやうとの計畫が彼とヘステインクスの間に持上つたのは一八九四年であつた。翌年の初めにコリーが之れに參加し、一八九五年六月二十日に彼等三人はヒール・汽船會社のカレドニア號に乗船し英國を後にしたのである。

七月五日孟買に上陸以後の行動を日誌體に記述してみよう。

七月五日ボンベイ上陸。

七日 汽車にてラッパル・ベンディ着車中の暑熱甚しく最高百三度に達す。

九日 トンガ(二輪の馬車にして當時この地方に於ける唯一の交通並びに運搬機關なり)の旅を續けパラムラに着、モンスーン期の豪雨のため道路の崩壊、橋梁の流失せる箇所尠からず。

パラムラよりドンガと稱する船底平なるボートにて水路シエラム河を遡り、ウーラー湖に出で北岸のパンティイプール着、海拔六千呎カシミール高原の氣候は南佛蘭西の夏の如く溫和にして、風景の絶佳なること形容の外なり、此處にてケルカ第五聯隊附ブルース少佐の好意により驛馬を得たり。

十一日 行李を驛馬に駄しナンガ・バルバットに向ふ。

十四日 カムリ・パス(一二四三八呎)を越ゆ、峠の上より一行始めてナンガ・バルバットの雄姿を望む、四十哩以上を距つ彼方に群山を抜きて驚ゆ。壯觀言語に絶す。

十六日 ザイプールにて荷擔夫及び驛馬の支拂をなしパンティイプールに歸らしむ。土民の援助を得てタ

日本山岳會會員 學生有志晚餐會

今般 東京在住山岳關係學生の親睦を計り兼ねて日本山岳會と學生との融和、接觸を増進する目的を以て私ども發起人となり有志晚餐會を催す事になりました。會名は假りに、「日本山岳會々員學生有志晚餐會」として有ります。けれども上記の目的にそふ爲に集會者の範圍は比較的廣いものとし、必ずしも日本山岳會員たる學生、乃至先輩、及び加入學生團體のみに限らない事としました。最初の會合は左記の通り開催します。

時日 十二月十五日(木)午後六時

場所 新宿白十字二階

會費 八十錢

尙當日は最初の集會でありますから日本山岳會の先輩中より特に小島島水、横有恒、高野鷹藏、木暮理太郎、田部重治の諸氏を此の會の名を以て招待し、承諾を得ました。會の將來に付いては當日更めて御相談し、その結果自らその方向が與へられる事と思ひますが、私どもは日本山岳會々員として、かゝる會合を通じて同好學生相互間の親睦を促進し、併せて學生一般と日本山岳會との關係をより密接ならしめる上の一契機を與へる事が出来れば非常に幸ひだと思ひます。

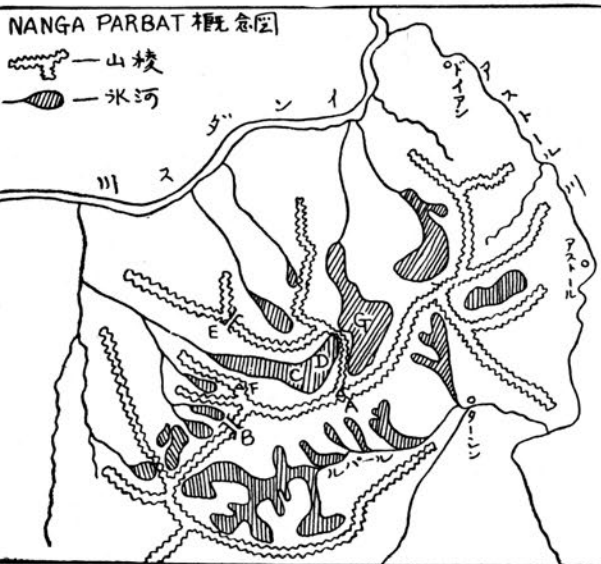
何卒、奮つて御參會あらん事を希望します。

發起人(順序不同)

澤本辰雄、島田武時、中屋健式、

加藤泰安、田口一郎、斯波梯一郎

小川登喜男、初見一雄、鈴木恒



- | | | | |
|---|-----------|---|------|
| A | ナンガ・バルバット | E | バイ・ミ |
| B | ガノ・ミ | F | レイ・ア |
| C | デミ | G | レイ・ア |
| D | デミ | | |

シン部より稍上流パール河
畔に天幕を張る。ナンガ・バル
ツトの直下なり。

十八日 マンメリーとコリー、ナン
ガ・バルツトの南面を偵察の爲
パール河右岸二〇四九〇呎の一
峰に登るべく出發す。Chiche 水
河の中途に野營す。日没前霧晴れ
目的の南面を明瞭に望み得たるが
この方面よりの登攀は殆んど絶望
に近し、パール河より絶頂まで
一萬四千呎乃至一萬五千呎の垂直
に近き懸崖にして、絶壁又絶壁、
之にハンギンガ・クレシア懸れり。
地圖上に於て測定するに水平距離
僅々二哩足らずにて標高差一萬五
千呎に及ぶ。歐洲アルプスにて之
に匹敵する傾斜度を求むればシヤ
ルモ及びグレボンのメール・ド・グ
ラス側に於て稍近きものを得べ
し。

二十日 マゼノ・ラ(一八〇〇〇呎)
を越しパール河畔一三四〇〇
呎の地點に露營す。

二十一日 テイアミライ氷河に達し
得ず一二五〇〇呎の地點に野營。

二十二日 テイアミライ氷河に達し
キャンブを張る。高度一二四五〇
呎、氷と雪の巨塊ナンガ・バルバ
ツト吾等の上一萬四千呎の高きに
聳ゆ。マンメリー登路を探索す。

二十三日 テイアミライ・パス
(一八〇五〇呎)を南に越え、再び
マゼノ・ラを通過しターシン附近
のキャンブに戻る。ブルース二名
のグルカ人を伴つて来る。

二十七日 マンメリー、ブルース、
コリー二名のグルカと共にターシ

ン・ピーク(一七〇〇〇呎)に登
る。

三十日 再びテイアミライ氷河に至
るべく全隊出發す。

三十一日 マンメリーとヘステイン
クス約二萬一千呎の地點に達し、
引返して一萬九千呎の地點に露營
す。

八月二日 テイアミライ氷河に達
す。

五日 グルカ二名を残してブルース
任地アボタバードに歸へる。この
日マンメリーとコリーはグルカを
伴ひ氷河の上方に至る。

六日 マンメリーとグルカ一名(ラ
ゴビール)ナンガ・バルツトの
西面一萬八千呎の地點に登り天幕
を張り得る個所を見出す。

八日 右の發見されたる地
點(一七一五〇呎)に野營用具食
料を運び上ぐ。

十一日 テイアミライ峰(一九〇〇
〇呎)に登頂す。

十五日 マンメリー、コリー、九日
食料を運び上げたる地點に出發せ
しもコリー頭痛のため引返す。マ
ンメリーとグルカ尚ほ登る。

十六日 マンメリーは過日の地點よ
り更に一千呎に登り食料を入れ
たるルツサツタを置き引返す。

夜に入りて天幕に歸着。

十七日 終日雨、雷鳴を伴ふ。夜に
入り烈風吹き山上より雪を落し來
る。

十八日 二十日 マンメリーはグル
カを伴ひ二萬呎の地點にまで苦闘
登攀したるもグルカ故障のため引
返すの已むなきに至る。

二十三日 マンメリー、ボーターを
伴ひテイアマ・パスを越すべく出
發。

二十四日 ハイ・キャンブよりグル
カと共に出發し遂に行方不明とな
る。

かくして彼マンメリーは遂に我等の
世界から姿を消してしまつたのであ
る。コリーの言葉を繙けるならば「無
情なる山が彼を要求した」のである。
それは永久の謎だ。

コリーは悲しみの心を抑へて書い
てある「マンメリーと二名のグルカ
はナンガ・バルツトとガナロ・ヒ
ークとの間に横たはる氷河の上方に
於て殺されたといふ結論しか出て來
ない。彼等が執らんとした登路以外
には絶對に路はないからである。ラ
キオツト氷河へ越すテイアマ・パス
の東面は吾々の知る範圍に於ては不
可能な所であるし、南にはナンガ・
バルツトが、北には二萬一千五百
呎のガナロ・ヒークが聳立してゐる
のだ。彼等が食料のために立戻らな
かつたとすれば、パスを越すべく彼
等が登攀を續けてゐる間に何かの不
祥事が起つたのだ。

私の觀察した所に據れば、ナンガ・
バルツトの北面から落ちた雪崩が
最も信じ得べき説明のやうに想はれ
るが、あの茫漠たる氷の世界に於け
る隠れた危険は餘りにも多い、いか
なる想像をめぐらせるとも、それは
畢竟單なる空虚な推測に過ぎないの
だ。いかなる事が起つたのであつた
か、吾々は未來永劫にそれを識るこ
とは出来ないのだ。」

四

この近世登山史上永久に記憶せら
るべき悲劇の主人公アルバート・フ
レデリック・マンメリーはいかなる
至ひ立ち経歴の持ち主であるか。

彼は一八五五年九月十日英國ドー
ヴァーの町に生れた。その登山経歴
は彼が十六歳の年一八七一年初めて
瑞西を訪れテオテールの峰を越えた
ときにはじまる。其後年を遡つて彼
の山岳に對する熱と愛とは高まり深
くなつていつたのであるが、當時歐
洲アルプスに於ては登山史上の所謂
黄金時代既に去つて著名なる高山の
類にして極められざるものは殆どな
いといふ時代であつた。彼の闘志を
満足せしむるに足る峰頂は、既に踏
まれたる登路より之を登攀するに於
ては、殆ど見出し得ないやうな時代
であつた。こゝに於て從來登攀不可
能と思はれるやうな岩稜氷壁に新た
なる登路を刻まんとした新銳の登山
家の幾人が、現はれたのである。彼
マンメリーもその内の一人であつた
否、最も果敢なそして最も多量の輝
しき記録を遺した一人であつた。私
はこゝに彼の登山経歴を述べるこ
とを避けて彼によつて成就された難
登攀のいくつかを挙げるに留めや
う。

南西面よりする新登頂。
一八八七年 トイフェルスグラー
よりテシエホルンへの新登頂。
一八八八年 カウカサス第二の高峰
テイクタウ(五一九七米)の初登
頂。
一八九〇年 再びカウカサスに赴き
Ft. Argyn Pass の初登攀。
一八九三年 ダン・ド・ルケン及びエ
ギエド・ブランの初登頂。
一八九五年 ヒマラヤに遠征しナン
ガ・バルツト北面に於て登攀中
行方不明となる。

彼の登山経歴は右に掲げたもの、
みを以てしても、まことに何人の追
隨をも許さぬものがある。
私は今暫く筆を轉じて彼の風格の
一端を偲ぶと思ふ。マンメリーと
時代を同じくし今も尙鏗鏘たりとき
く英國登山界の耆宿マーティン・コ
ンウェイ卿は彼についてかう語つて
ゐる「彼は多くの登山家達の中でも
山の天才と呼ばれるべき人間である。
彼と山との間には以心傳心といふや
うな關係があつた。吾々が馬につい
て知つてゐるやうに彼は山々を知り
悉してゐた。彼の身體つきは運動家
らしくはなかつたが山を登るために
生れてきたやうな人間であつた。體
格はすらりとして目方は輕るかつた
彼は背骨にやゝ疾患をもつてゐたの
で荷は擔げなかつたが、それで差支
へるやうなことはなかつた。四肢は
長く恐ろしく敏感で、急な岩壁にま
るで魔術でくつついてゐるやうな彼
は蜘蛛みたいてであつた。背丈も高か
つたがよく身體が利いた。あるかな
いかの岩角に爪先が引掛つてゐて、

一八七九年 ツムツト山稜よりマツ
ターホルンへの新登頂。
一八八〇年 フルゲン山稜よりマツ
ターホルンへの新登頂、エギエ
デ・グラン・シャルモの初登頂。
一八八一年 エギエド・グレボンの
初登頂、エギエド・ウェルトの

腕を伸ばして一二本の指が引懸ればもうそれで充分身體を持ち上げるこ
とが出来た。手足の力は非常に強く
それに目方は軽らかつた。その天性
からか或は長き経験からかどの程度
まで自分の身を安全に保ち得るかといふことを彼はよく知つてゐた。恐らく彼は一度もスリッパしたことはないまい。常に自身を全部的に信頼し決して惶てるやうなことはないかつた。いかなる寒氣にも耐えいかなる高度に於て野宿することも否まない夜が明ければ前進し得ると分つてゐる場所では非常な寒さにも擬乎夜明を待つてゐる、山頂に達するのがどんなに午後おそくなつても、途中で野營することが確實であつても彼は未知の降路を敢然と下つてゆく、一兩日の経験で彼はよくひとつの山群の特長を掴んだ。登路の未踏既踏は彼にとつて何でもなかつた。彼は自分の道を拓き最も善きガイドを同じやうにリードすることが出来た。

彼は輕量な装具を案出するに長けて傳統に拘泥する所がなかつた。多くの登山家から横紙破と思はれても彼は質のよい非常に細いロープを使つてゐた。クライミングは彼にとつては樂みであつた、探究ではなかつた。山の地質などは全く意に留めず測量器械や寫眞機を厄介物視した。彼の持つてゐたのは困難な登攀に對する法悦だけであつた。

彼は天才的なクライマーであつたが、しかし單なるクライマーではなかつた。審美的方面よりも寧ろ智的方面に恵まれてゐた彼は哲學的な心の持主であつた。

彼と同じ時代に於ても、或はまた過去に於ても最も優れた登山家と謂はれたアルバート・フレデリック・マンメリーは地球上に於ける最も壯大なる山の懷にその生涯を終はつた。彼にふさはしい墓場を選んだといふべきである。」(完)

(一九三三・六・五稿)

参 照 書 目

○J. Norman Collie, Climbing on the Himalaya and Other Mountain Ranges. 1902.
○A. L. Mumm, The Alpine Club Register, Vol. II. 1928.
○Martin Conway, Mountain Mem-

★ 研 究 欄 ★

アルコールコンロ

初 見 一 雄

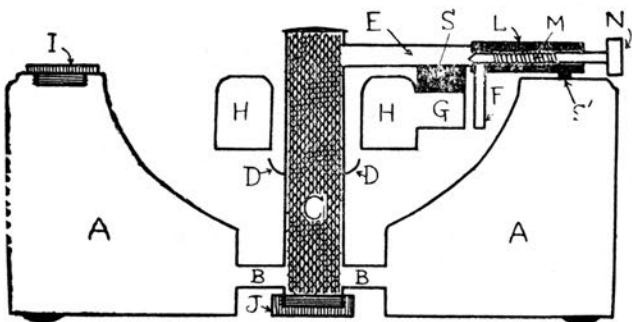
積雪期の登山に際し、特にピプアークを必要とする場合、そして焚木を全然獲られない場合、炊事用具としてコッヘルを使用するか、または石油コンロを使用するかは其の便不便、つまり火力調節可能な點から現在携帯用小型石油コンロ——Outing——の類が用ひられて居る様である、コッヘルに用ひられるアルコール・バーナーは火力の調節が不可能なので等閑視されて居る様である。石油コンロは火力調節をなし得ても、其の重量、容積、取扱ひの煩雜さと云つた點に於て、又は石油の

ories, 1920.
○大島亮吉氏。登山史上の人々。遊技的登山派の開將マンメリイ。昭和四年慶應山岳部發行登山行第七號所載。
○木暮理太郎氏。第三回エヴェレスト山遠征。大正十三年日本山岳會發行「山岳」第十七年第三號所載。
○木暮理太郎氏。外國の高山百座。日本山岳會發行一九三二年版「山日記」所載。
追記——脱稿後ヒマヤン・ジャーナル第三卷にシエネラル・ブルースの執筆した「マンメリイの最後」なる一文のあるを知つた。参照し得なかつたのは残念である。

臭味と云つた點に於て前者よりむしろ缺點を多く具有する様に思はれる。そして亦實際山へ行く時、コッヘルも石油コンロも双方ながら持参する向が多い。而し多數の擔夫を役する場合は除いては、道具は是非とも自分等で背負はねばならず其の點、器具は輕量、簡單、且つ堅牢でなければならぬ、まして炊事具等は一種限りしか持参を許されない場合が多い、コッヘルに使用されるアルコール・バーナーに火力調節の出来る装置をほどこし得るならば、と以前より考へ、種々試作せる結果、之の

程や、玩具の域を脱せるものを得た。故この一欄を借りて發表する次第である。而し唯單なる加熱器具の一種でしか有り得ないのであつて、貴重なる此の紙面を潰す事を恐れるものである。

普通のバーナーは注ぎ込まれたアルコールを火口迄吸ひ上げて燃焼する。吸ひ上げる理由は、毛細管現象によるのであつて、アルコールは充分に氣化されずして燃へる、液體の儘の燃焼では火力の調節は至極難かしい、どうしても一旦氣化させてガス體にしなければならぬ、而してガス體になつたものを流出させる時に調節を行ひ得るならば、火力も之に應ずる次第なのである。先づアル



コール貯水池を設け、其れより毛細管現象によりアルコールを吸ひ上げ吸ひ上げられたものを熱して氣化する方法をとつた。携帯に便ならしむる爲め、火口をタンクと同等の高さにした、タンクの貯水量は一立弱である、以下圖について説明する。

形は高さ二寸三分、直徑五寸八分の圓形の立方體である、Aはアルコール貯水池であり一立の容積を持つBは貯水池より毛細管同箇への誘導管であつて之によりアルコールは毛細管同箇へ間斷なく注がれる。Cなる同箇には内部に、木綿の纖維を燃つたものを充填する之がアルコールを吸ひ上げるのであつて、つまりランプのシンの様な役割をなす。其の充填物も木綿の纖維に限つたものばかりでなく、脱脂せるものなら何でもよいのであつて、細かい糸を無數に束れたものなら、そこに毛細管現象を現すはすである。

Dなるものはアルコールの受皿で使用する最初に少量のアルコールを直注し得る装置である。Eはガス誘導管Fはガスの出口であつて火口Hに向つて放射される、火口は圓筒Cの中核として環狀に作つた、Gは火口Hへのガス吸入口である、Iはタンクへのアルコール注入口、Jは圓筒の底部の螺旋で充填物の詰めかへに便ならしめた、S、S'は共に支柱である。

次にEなるガス誘導管の細部を説明する。
誘導管の中間にLなる點を求め、調節桿Mを以て、螺旋によりL點に於てガス流通路の開閉を行ふ、つま

りFへのガス流入を調節するのである。
断面圖は以上の通りである。

使用について

最初、D皿に少量のアルコールを注入し之に点火する、而してC筒筒の頭部は熱せられ、吸上げられてある内部のアルコールは氣化され、ガス體となりE管に誘導される、調節點Lの開口によりガス體はFを通り火口Hのガス吸入口Gに放射され、環狀火口Hに於て燃焼を開始する、而して燃焼管中管の頭部は常に熱せられる故に、ガスは間斷なく製造されるのである、火力は調節桿Mの加減により増減する。

構造上の二・三の點

最初、タンクとC筒筒を密着させて作つたが熱の誘導物洩れ、タンクが猛烈に熱せられ、中のアルコールが沸騰し始め、H・F等から發火して失敗に歸した。それ故、能ふ限りタンクと絶縁出来る様にする爲め、タンクを繰り抜いてBなるアルコール通路を作つた。

火口をタンクの縁より上位位置に置いたが携帯に不便であり、破壊の虞れがあるので、タンクの縁より低く持つて来た。熱の傳導は、多いがタンクが持つてなくなる程、熱くなる心配はない。而してタンクに凹みをつけたので全體の大きさが豫定より超過した感がある。

ガス放射管Fと環狀火口Hの吸入口Gとの距離は相當の考慮を拂つた近すきても、遠すきても駄目である。

之の距離關係はアルコールガスと空氣の混合率の加減をなすもので、火力に對し相當の影響を與へるものである。

タンクの容積を一立入りとして作つたが、別にアルコール容器（通常アルコール・タンクと稱せられるもの）を持つて参るならば、二分の一立入りの大きさが適當の様に思ふ。調節桿Mの取手Nは取り外し自在にし、火力傳導による加熱を防止した。

材料金屬は眞鍮を用ひ、極度に堅牢を尊んだ。總重量は二百四十匁である、而しもつと輕量であることが望ましい。

X

試験後の結果を擧げるならば、火力の調節は全く自由であり可成り強大である。二合の冷水を五分強にて沸騰せしめ得、又一立のアルコールは四時間強の連續燃焼を保たしめた。石油コンロとの比較をなしたかつたが、遂に暇を得ず、未だに其れをなし得ないのを遺憾とする。

山岳會追捕及新設

宇都宮スキークラブ

宇都宮市大町九二 高野恒二方
一九三二年十一月設立 十五名 會報二回

札幌會

日本橋區小網町二ノ十一 武藤商店内 一九二六年十月設立 百十七名 會報月一回

九州山岳聯盟移轉

九州山岳聯盟事務所は今般左記へ移轉せり
戸畑市幸町停留所前



山の消息

關東學生登山聯盟 解散聲明書

創立事情 我關東學生登山聯盟は一九二九年十一月創立せられ、滿三ヶ年の星霜を経て今日に至る。

本聯盟創立の主たる目的は當時發表せし宣言書に記載せるが如く、一には當時の登山界の事情に即し我國登山界に鞏固なる統一體の確立を促し、我聯盟をしてその有力なる支持體たらしめんとする事、その二には加盟校相互の親睦、登山意識の高揚、並に經濟的負擔の輕減を計るにありしなり。

行動概観 我聯盟の最初企てたるは右の目的に従ひ我國登山界に於て最も古き歴史を有する日本山岳會に對し、より鞏固にしてより活潑なる統一體的指導の登山團體たらん事を進言するにありたり、而して偶々此の意圖は同會の容るゝ所となり、日本山岳會は諸々その實を擧げ輝しき將來を期待し得るに至れり。此處に於て我聯盟はその目的の一を果したれば續つてその力を内部に注ぎ、加盟校

をセクションに分割し相互の親睦を強め調査研究の部門を設け加盟校中より選出せられたる各委員會その任に當り、機關誌號を重ねる事三度客年末第三號の發刊を見るに至れり。

傳統的の精神のもとに、聯盟により培かはれし協調の精神を忘却せず今後益々登山界の健全なる發展に努力せんことを期す。

即ち創立當初我聯盟は各學校山岳部の熱情的參加により凡ゆる目的と内容を有する各學校山岳部を含み、此等の協力に依り完全なる統一的發展を期するにありしものなり、然れども目的を異にする數多の山岳部を含む組織體は統一行動を採るに種々なる支障を來したり、即ち聯盟の機關たる委員會の行動を極度に掣肘し調査研究の各部門の退却を促進し、聯盟の活動をして著しく不活潑たらしめたり。是が對策として個人組織への改造案等提唱せられたるも實現の機に至らず、斯して加盟校の聯盟に對する關心漸く薄らぎ、加盟校を以て煩瑣なる聯盟事務に倦怠を覺えしめ、此處に聯盟は行詰りに達するに至むなきに至れり。

斯かる狀態の下に一九三二年度五月總會を開きたる結果、聯盟解散すべしとの主張多數を占め、次いで同年十一月十九日の秋季總會に於て遂に解散を決定するに至りしものなり。今後の態度 創立滿三年、聯盟に解散す。

登山團體調查に就て御願ひ

山日記一九三二年版に收録された全國登山團體は短日の調査に成りたるものとて、未だ遺漏なきを係し難い。尙又その後新たに設立せられた團體も相當あること、思ひます。就て本會としては極力各地の登山團體宛に調査を依頼しておりますが會員諸氏に於かれても、既に發表せし分（山日記並に會報第十九・二十號で追加發表の分）以外に御氣付のところがございましたら、是非其所在地、代表者名等本會宛に御通知下さる様御願ひします。

青山學院高等部、中央大學、第一高等學校、福島高等商業、法政大學、駒澤大學、松本高等學校、明治大學、明治學院高等商業部、日本大學、日本齒科醫專、大倉高等商業、立教大學、拓殖大學、東京文理大學、東京高師、東京醫專、東京慈惠會醫大、東京工業大學、東京農業大學、東京商科醫專、東京商科大學、東京帝國大學、浦和高等學校、早稻田大學、山形高等學校各山岳部

◎穂高涸澤の山小屋建設豫定地についで

山小屋建設計劃の経過は前號及本號別項に記載の如く、各々分擔して仕事を進行させてゐるが、本號に設計圖其他の計劃の具體案の發表出來ないのは遺憾である。この理合せにとも考へ、建設敷地附近の寫眞を一枚掲げて、説明に及び度いと思ふ。

この寫眞は北海道帝國大學文藝會山岳部報第一號(昭和三年六月發行)に發表された山縣浩氏撮影の「春の北穂高岳」と題するものである。

穂高涸澤に於て、積雪期は雪崩より安全であり、夏は飲料水に便利な場所が數多ある譯ではない。山麓の獵師や涸澤に經驗の深い會員等より出來るだけ多くの意見を求めて結局選定したが、池の平の北穂高岳寄りの岩壁の下である(寫眞参照)。

山小屋は寫眞中央岩壁の向つて左寄りに接近させて建てる豫定になつてゐる。岩壁の高さは約二十米突、岩壁下の雪の斜面は約二十五度前後で、夏はガレと草付よりなり、岳樺が少しある。依つてこの斜面に石積をして土嚢を造り、その上に小屋を置くやうになる。飲料水は岩壁右端の凹地にも清流があり又萬一湧水の時は岩壁の下方(寫眞には見え)北穂高澤の水を引く豫定である。積雪期は雪水より他に方法はない、燃料は池の平の下の森林帯より岳樺の類を運ぶのであるが、穂高小屋肩の小屋に比すれば勞力は遙かに妙い。

雪崩の危険は此の位置選定に際して最も審議されたところのものであつて、等しく意見の一致した結果である。前穂高より走る雪崩は池の平の最低部を流れ、穂高小屋の谷よりのもは前者に合流するのであらうといふのが、多くの意見であつた。寫眞正面の北穂より發生する雪崩はこの岩壁を越えるのではないかと、いふ疑問も起つたのであるが、この岩壁の上部の臺地は恰も島の如く浮び相當の廣い平地を形成し堀松と岳



壁及岩壁下の岳樺の二個所に積雪標を建て、置いた。今後は十二月下旬より來春五月頃まで、委員會は涸澤に入る多くの會員に調査を依頼して報告を求め充分なる研究を盡す方針である。そして之を機會に横尾谷より涸澤に亘る詳細な道案内と雪崩地圖が完成すれば幸ひである。(角田)

鳴川の小屋(新設)

位置北海道函館近郊、横津岳中腹鳴川谷七飯驛より一里半。昭和七年

第五十七回小集會記事

昭和七年十一月二十五日 於芝三會堂午後六時

一、クル溪谷

三田 幸夫 氏述

一九二七年以來印度に在勤せられ近年、病氣の爲め内地へ歸られた三田氏の講演の概略である。氏が昨年末より今春にかけて約一ヶ月の休暇を利用しバンガチャップのクル溪谷附近に行はれた紀行を内容豊かに語られた。

クルの谷を廻る山は二十年程前にブルースが行つて居り、其の時同行したヒュラーのフーラーが、先年カナデアン、ロツキーへ行かれた時、氏が伴はれ、其の話から以前より興味を持たれるに至り、今春の機會を其の谷に過すべく一月十四日、カルカッタを出發されたのであらう。

テント、スリーピングバック及びクリ十二人の裝備を含む四貫平均の荷物九個を整へ、鐵路千四百哩を行き後自動車便によりサルタンブルを徑て、マナリ村に着せられた。マナリ村に果樹園を經營して居るベノ大尉のバンガローに宿られ、十一人の人夫と共に一月二十一日に出發、ピアス河を逆行された。

マナリ村附近の溪谷は非常に上高地に似て居り、其れを狭くした様で又山容はギザギザして居り穂高を鋭くした様であると語られた、そして今回の目的はロタン峠より、ピアス

リツキの登攀を行ひ、而る後ラホル側へ降りチヤンドウラ河を下りシカールベを目指されるにあつた。ピアス河の支流マニニ谷の入口にテントを張られ、其處より八名の入夫を歸し、二十三日にロタン峠へ向かはれたが、峠へ着かれてから後、天候惡化し、マリの小屋跡へ露營された。其の翌日吹雪の中を入夫の主張を容れて降る事にし、途中道を失ひ、とある岩石の下にピウアックを餘儀なくされた。其の翌日は晴後吹雪で、晴間の中に、道を發見し、ピアス河へと降られ、マナリへ引返へされた。二名の入夫は凍傷にやられ且露營地には、大部分の準備品を残されたまま、退却を餘儀なくされたのであつた。

以上が内容の大略で、外にサルタンブルでラーシャを訪問された事靴擦れとルンチブラーの事、そして私達の聞きたいと常と思つて居た、裝備や食料の事について詳細に話して戴けたのは幸な事であつた。氏は計劃の十分の一をも果し得ず又よき經驗も獲られず残念であつたと語られ、最後に、ヒマラヤはどんな小さな所でも馬鹿には出來ないものだと言はれた。(K・H記)

樺の密生してゐる等状態より見て雪崩は二分するものと看做された譯である。

結局山小屋委員として、目下第一に必要とされる仕事は涸澤の雪崩の研究である。そして之は從來の登山者の經驗を聴取したり、夏の地形を研究するに留らず、統制ある組織のもとに、一同が協力して調査と研究に當らなければならぬ。今秋十月瓜生正、角田兩名が現地に赴き、岩

十一月新設。所有者函館日魯漁業會社内スキー山岳部。二間半三間木造二階建、スキー置場、炊事場、食堂が階下にあり、二階は寢室。使用規則不明。北海道ほど多くのスキーヒュッテに恵まれた土地は他にないが又ここに、今冬は函館を中心としたスキーヒュッテが設立された。今後小屋の計劃者は北海道のスキーヒュッテのプランを研究されたならば、參考となるであらう。

今冬の山小屋調査

……十一月二十日發信 本會調査……

北海道

▲空沼小屋 收容二〇、寝具燃料有
食料無、使用料二十五錢、一泊五〇
錢二泊七十五錢小屋附近積雪二尺
▲ヘルヴェチア・ヒュッテ收容二
寝具燃料有 食料無、一泊二〇錢(本
年より値下げ)小樽定山溪専用自動
車道路開通により通行拒絶されたる
事ありしも、交渉の結果小屋訪問者
の通行権を保證することとなる。
▲無意根小屋 收容十五、毛布二〇
枚薪豊富、食料無、小屋番十二月十
五日—翌年三月末日滞在、一人二十
五錢一泊五十錢二泊七十五錢小屋附
近積雪三尺。
▲長門ヒュッテ 收容七、毛布七人
分燃料豊富、食料無、一日十五錢、
豫め申込の上使用のこと、鍵取扱所
富貴堂運動具店札幌南一西四。
▲奥手稲山の家 收容三八、食料以
外全部備、小屋番十二月一日—四月
末日、一泊五十錢、休養料十五錢、
五—十一月末日閉鎖。ラヂオ、室内
照明用電燈使用計畫中。
▲中山峠ヒュッテ 收容三〇、寢蒲
團二〇、毛布一〇、燃有、食料は申
込にて準備、使用料二十錢、小屋番
留守居の爲使用者に同行。
▲パラダイス・ヒュッテ(北大スキ
ー部)收容三〇、寢布團、毛布、食
器三十人分、薪有、食料無、一泊學
内十錢、學外十五錢、使用料内五錢

東北

外十錢、小屋番十二月十六日—四月
十五日、スキー部合宿の際は一泊使
用禁止、水道、シャランツエ修理濟二
三の食事販賣の豫定。
▲天狗山ヒュッテ 收容八、寝、燃
有、使用料四十錢、合宿に便。
▲ゴホルト・ヒュッテ(蔵王山)
收容二五、寝具燃料有、食料無、一
泊三〇錢、三月六日約一週間合宿練
習す。ヒュッテより地藏岳に至るス
キー路切開きを完成。
▲青木小屋 收容四〇、寝具燃料食
料電話有、小屋番十二月一月、一泊
三食付一圓一〇錢、
▲蔵王小屋(東北帝大スキー部)收
容二〇、寝具(シュラフサツク)
敷、米三俵、味噌十三、有、使用
料三十錢、米味噌一日十錢、合宿中
のみ小屋番有他他の時期は當部より
鍵を受ける要あり、本年十二月二十
五—一月十五日迄一般使用拒絶、積
雪一尺、新道小屋より道標完備。
▲白樺ヒュッテ(東京文理大山岳
部)收容二〇、寝具、燃料有、宿泊料
(三食付)當部合宿中八〇錢、使用
料(同上期間外)五〇錢、申込許可
後鍵交附。豫約申込なき者は拒絶す
合宿期間十二月十八日—一月十日、

二、朝鮮集仙峰

小川登喜男氏述

朝鮮の山が登山の対象として見ら
れるやうになつたのは比較的最近の
事である。殊に金剛山は古くから其
自然の美しさを以て多くの遊覧客を
ひきつけてゐたが、純粹に山登り
の目的を以てこの山を訪れた人は今
迄餘り聞いてゐない。そうした意味
からも小川氏等東京帝大山岳部一行
の、今夏の此の方面での活動を中心
に登山者としての觀點から話された
氏の講演はまことに興味深いもので
あつた。

氏は先づ今回の朝鮮行の動機を語
られ、次いで目的とされた外金剛集
仙峰附近の地形、岩質等詳細に語ら
れたが、それによると、一行五名の
訪れた集仙峰は岩石の美を以て有名
な金剛山の中でも代表的な岩山であ
ると唱へられてゐるもので、標高は
千四百米内外にすぎないが、その突
元として削聳する荒寥たる山容は内
地の山では餘り見られない奇異な特
長を持つたものださうである。

全山を構成してゐる岩質は主とし
て花崗岩と片麻岩であるが、殊に花
崗岩は極度に風化侵蝕されたもので
あまつさへそれが手掛りや足場の殆
んどないスラブになつてゐる爲、甚
だしく岩登りの興味と一行の行程を
阻害されたと言はれたが、これなど
將來この方面に向はんとする者のよ
き參考となるであらう。

八月下旬山麓に着いた一行は、先
づ根據地を集仙峰直下の勸石洞に定

めて以後約二週日を此の地にどゞま
つて活躍してゐる。例年より遅れた
朝鮮の梅雨季に妨げられて、充分な
活動が出来なかつたと云はれたが、
それでも此處を中心に五箇所の峰に
新しいケルンを積んでゐる。即ち
主峰中最も代表的な一三五〇米ヒ
クはその西南側から支稜を辿つて登
頂後南面の急谷を降り、東北に派出
して居る峻峻な岩稜には五ヶ所の踏
路によつてこれを登攀してゐる。更
に又その西方に屹立してゐる世尊峰
にも足跡を印す等、從來知られなかつた此の方面を縦横に拓かれた氏等
の努力は大に偉とせねばならない。

前後約一時間或は寫眞により、地
形圖によつて以上の他、根據地、天
候、人夫及び内地の山との相違點に
迄及んで詳細に語られた小川氏の眞
摯なアカデミカとしての講演は聴
者をして大いに傾聴せしむるものが
あつた。又、その言葉の持つ意味と
響は様々であれ、兎に角内地の登山
の行詰りと云ふ事が矢張り叫ばれ
てゐる昨今、たとひ対象は小さく、
地理的にも近すぎ易い朝鮮であると
しても、かうして地味に堅實に行き
得る一行が學生群の中にあると云ふ
事は、將來の大きなものへの約束と
して大いに力強い事と、氏の講演を
聞きつゝ、しみじみと思へた事であ
る。(K・K記)

◆山日記讀者寸評◆

●本年度のは昨年のに較べて物凄
いばかりの躍進ぶりです、表紙も山
男向き、寫眞も素晴らしい。

●寫眞は蛇足の感あり、且題材古く
さく、藝術的香うすし、この程度な
らない方がいい。目方とかさをふや
すだけだ。山日記は目方とかさを小
さくすることに全力を注がれたし。
●何を間違えても期日に遅れるとい
ふことが一番感じが悪い。勿論編集
者の最大努力は認めてゐるが。
●山日記を中心にして座談會を開か
れては如何ですか。

●住所欄が復活したのは大變嬉しい
です。
●寫眞が入つたのは大變うるほいが
出来てゐます。小舎で寝轉んで居
る時退屈が凌げる。
●表装及内容の組合せは斷然好い。
がつりしにスマートだ。

●來年度のものにはきつと大和アル
プスの日程表を入れてほしい。たゞ
それだけが僕には残念だつた。
●インキにグレーを用ゐられたのは
洒落では見えますが、暗いランプの
下で消えやすいラテルネのおかげで筆
をとることの多い山日記は、もつと
鮮明でありたいと思ひます。
●月入、月出を書いて欲しい。日
は朝出て夕入るけれど月はその行
かない。暗いうちに起きて夜まで歩
く者には月が大切だ。
●會心的の傑作傑作!
●峠高度表は所在地の代りに兩側の
山の名をあげて下さい。
●星座圖を入れて下さい。
●處々に廣告が入れてあるがあれは
山を愛する者の感情を害するであら
う(營利的な所が見える)。
●自由日記欄の頁を増すこと。

二月十一日前後三月十日—四月二十日。

▲毛度澤小屋（法政大學山岳部）收容二〇、毛布二〇枚、燃料有り、使用料一泊五〇銭、希望者は當部へ申込、許可證を求むること。

▲湯の花温泉小屋 收容二〇、寢具十人分、燃有、使用無料食費、小舎番有、小屋附近積雪無。

▲苗場山ヒュッテ（東京慈恵醫院大山岳部）收容四五、寢具燃料食料有、小舎番常住、一泊三食付一圓五〇銭、風呂、賣店有、今年一部改修暖房裝置完全、合宿期間十二月二十日—三十日、三月二十日—三十日。小屋附近積雪二尺（十五日）。

▲外ノ川小屋 收容三〇、寢具燃料食料有、小舎番常住、一泊三食付一圓二〇銭。

▲銀山寺（銀山平）冬期は須平口拓殖事務所使用收容三〇、寢燃食有小舎番常住、宿泊料實費（一圓位）五人以上使用の際は豫め越後北魚沼郡小出町櫻井又右衛門宛通知の事。

▲芳ヶ平ヒュッテ（草津）收容二〇、寢具若干燃料豊富食料申込次第充當す、使用料無料、今冬より草津町温泉組合取締所に於て管理す。白根山の爆發何等影響なし。

▲九地ヒュッテ（志賀高原）收容五〇、寢燃食有、小舎番十二月一日—三月三十一日滞在宿泊料一泊二食付九〇銭、同上三食付一圓、十二月二十七日—一月七日満員のことあり。長野電鐵宛問合せられたし。

上信地方

富士山

▲吉田口五合目桂屋號 收容五〇、寢具四十人分燃料豊富米味噌有、小舎番無、但し登山者ある毎に小屋主同行、宿泊料一泊三食付一圓五〇銭一〇人以上團體割引あり使用料六〇銭、案内料五合目迄一圓五十銭、頂上往復四圓、使用者は富士吉田町池谷佐重方へ立寄られ度し。十月下旬より十一月二十四日迄の登山者数は約百人。積雪五合目約三尺。

▲太郎坊旅館 收容七〇、寢燃食有小舎番十二月以降降雪と同時に閉店三月三十一日閉店宿泊料一圓五〇銭團體割引あり自炊相談に應ず。館主静岡縣駿東郡玉穂村中如福島源作。

▲四季樂園（三峰山頂）收容十二、寢具燃料食料豊富、小舎番常住宿泊料一圓五〇銭、自炊七〇銭積雪二尺五寸（十四日）。

▲クロフ小屋（神奈山）收容二〇、寢具燃料有、使用料一泊七〇銭、休憩三〇銭、關温泉富山屋に申込、鍵を借受る事、十一月二十四日積雪二、三尺。今年温泉よりスキー登路切開きをなす。

▲岡長小屋（笹ヶ峰）收容三〇、寢燃食有、小舎番常住、宿泊料三食付一圓、自炊五〇銭、積雪一尺、團體使用割引す。新潟縣中頸城郡杉野澤村岡田長助。

▲小谷温泉スキーヒュッテ 收容二〇、寢具燃料食料豊富、小舎番、十二月—四月滞在、宿泊料一泊三食付八〇銭以上一圓六〇銭まで。自炊五〇銭より。團體使用は一週間前申込のこと、十一月二十四日現在積雪一尺三寸。

頸城山塊

圖書紹介

秋風帳

柳田國男 著

（四六版二四〇頁、昭和七年十一月十日發行梓書房、定價一圓五十銭）著者に取つて最も記念すべき旅行の年たる大正九年に草せられた三つの紀行の中、「海南小記」及び「雪國の春」は已で夫々一冊の本として上梓せられ、獨り「秋風帳」のみは未だ公刊せられなかつたが、新しき物せられた十五頁ばかりの序文と「未曾より五箇山へ」佐渡一巡記と「峠に關する二三の考察」等七つの小篇と共に遂に世に見ゆるに至つた。大正九年と言へばもう十二年も前の事で、まだ中學生であつた自分は朝日新聞に連載せられた「秋風帳」に就ては讀する所も無く、自分にとつては言はず今度初めて發表せられたに等しかつた。自分で如き若輩に於て惜しい、當時、新聞で斷片的に讀まれた人々に取つてもうその記憶は殆ど失せた頃になつて一冊の書物を纏つて現れて來た事は新しいものを讀む感に等しいであらう。



「秋風帳」は先づ小泉八雲に縁の深い焼津に始まる。大井川と天龍川の間に數日を過ごし、濱松から二俣を経て舞木峠を越えて三河に入る。この舞木峠は曾ては風來山參詣の爲に用ゐられた時代もあつたらしいが近い頃には秋葉路であつたのを來て見て始めて著者は確信する事が出來た。これから作手、下山、松平を経て岡崎に至り、約五十年を北日本に過して「還らざりし人」菅江眞澄翁を憶ひ、紀行は此處に終つて居るが、足は更に延びて舉母から猿投、飯野を経て、地圖には名もない、然かし美濃と三河とを繋ぐ重要な道路と思はれる峠を越えて美濃路に入る。鶴を中心として書かれた「秋山のスケッチ」はこの峠の上の記述である。

如何せん總て過去の事柄である。著者から聞きたいのはこんなにも變動の甚だしい今日のその人生と山との關係である。多忙なる一端を旅に宛て、比類なき觀察を我等に示されん事を待望するのはあながち自分一人ではあるまい。

「未曾より五箇山へ」は明治四十二年初夏の紀行である。御岳の裾を廻つて高山から白川へと、今でさへ訪ふ人の少いこのルートは新緑の彼方に山々の殘雪を望みつゝ、過ぎ行きし若き日の著者はこの旅の終りに黒部の谷を訪れ、黒龍の温泉に一泊し、出平まで達して引返へされたのだつた。今でこそ問題にもならぬが、これは已で二十年以上も前の事だ。

「峠に關する二三の考察」は峠に就てのバイオニア・ヴァークの一つとして缺くべからざる重大なる文獻であつて、山へ行く仲間の間にも峠に關する關心は増大しつゝある今日山岳會の向ふを張つて峠會なるものを組織してもこれを怪しむ者は一人も居らないかと思ふと、著者の當時の空想も現實にまで成長して居る事實を窺ふに足りる。（渡邊慟）

山想日記 一九三三

（文獻堂書店發行、四六版定價一圓八〇銭）

自分の好きな著書の中から自分の好きな言葉などを抜き書きし綴りてみたといふやうな欲望を抱く人は少なくないであらう。現に我國などには「山岳文粹」といつたやうな編集は相當に試みられてゐる。地方別に文章を分けて集められてゐるものもあれば漠然と筆者々々で時代を追ひ乍ら纏

北アルプス

▲神ノ田小屋(早稲田大學) 收容三〇、寢具、燃料、食料米、味噌、醬油有、使用料八十錢、一食十錢、薪代及雜費を含む。小屋番年中滞在十二月下旬—一月初旬及三月中旬—下旬の間は部員外使用を拒絶す、但し豫め申込許可を得しものは此限りに非ず。スキー可能期間は十二月初旬—翌年五月下旬迄。使用希望者は早大山岳部の許可を得るを要す。(本年合宿は十二月十五日—一月五日迄)

▲白馬落倉スキー宿泊所 收容百二〇、寢燃食有、一泊一圓六十錢、小屋番十二月中旬—四月中旬。

▲白馬頂上小屋 收容三十名、寢燃食有、一泊一圓五十錢、小屋番無。

▲白馬スキー小屋 收容三五、寢燃食有、一泊二圓、學生一圓五十錢、小屋番十二月下旬—一月上旬、三月下旬—四月上旬、積雪一尺五寸、大糸南線森上、四谷開通す。

▲南俣スキー小屋 收容二〇、寢燃食有、宿泊料及小屋番同前、三月下旬—四月上旬間甲南高校豫約。

▲八方中繼小屋 收容一〇、避難小屋準備一切無。

▲唐松岳頂上小屋 收容四〇、寢燃食有、一泊一圓二十錢、小屋番無。

▲八峰キレット小屋 收容二〇、寢燃食有、一泊一圓五十錢、小屋番無。

▲大澤小屋 收容一〇、寢、燃有、使用料五十錢、小屋番無。

▲湯俣温泉 收容一〇〇、寢、燃、食有、一泊二圓、使用料一圓、小屋番五月—十月(不在期間は所有者へ交渉の事)

▲銀御前小屋 收容一五〇、寢具三〇、燃、食有、寢具使用料五十錢、其他公德販賣(小屋番は六月三十日—九月十五日以外無)積雪彌陀原五尺、銀七、八尺。

▲針ノ木峠小屋 收容二〇、寢、燃有、食料は必要に應じ準備す、使用料五十錢、小屋番無、積雪四尺、小屋露出。

▲追分茶屋、收容五、六〇、蒲團五十、炭五十俵、米、味噌有、使用料三十錢、小屋番隨時同行、積雪三尺。

▲一ノ俣小屋 收容四〇、寢、燃、食有、一泊一圓八十錢、小屋番十二月二十五日—一月二十日滞在。

▲德澤小屋 收容五〇、寢、燃、食有、使用料五十錢、小屋番常住。

▲穂高小屋 收容二〇、寢燃有(豫約により秋季用意す)一泊六十錢、今冬は學習院、明大、慈大、農大の豫約有尙多數申込の見込。所有者今田重太郎宛の通信冬期は岐阜縣吉城郡船津宛。

▲穂高温泉 收容三〇、寢、燃、食有、一泊一圓二十錢—一圓五十錢、小屋番常住。

▲スズラン小屋 收容一〇〇、設備一切有、浴場付、一泊一圓二十錢、中食三十錢—四十錢(團體及滞在者割引)小屋番常住。積雪三尺五寸、鈴蘭小屋附近一尺五寸。

▲乗鞍岳肩の小屋 本冬より營業開始收容一〇〇、寢、薪炭有、一泊一圓五十錢、使用料五十錢(番人不在の場合)小屋番十二月二十八日—一月八日、三月十八日—三月二十八日の間滞在積雪二十尺。

められたものもある。それ故人々は自分々々でその時の氣分に應じて氣の趣く儘に好む頁を開いて好む言葉を讀みかへす楽しみがあるのである。「山想日記」の目標としたところは、恐らくは、そんな楽しみを此の日記を使用する人々に與へようとしたのであり、そしてそれが此の日記帳の商品としての狙ひどころであつたと考へられる。併し一日一題として日記欄の頭にその文章を入れ込んだ爲に、殆んど致命的な失敗を犯してしまつた。つまり一月一日には「アルペンの精神——植有恒(山行)」を讀まされ、五月二十五日には「日本風景論——志賀重昂」を讀まされるんではどんな名文章でも窺得たり切れない。自分で計畫し、自分で準備し、そして自分の足で山に登る程の山岳人ならば、他人様の御膳立てその日／＼に名言美辭を讀まされやうには大人しくしないだらう。此の意味で「山想日記」はその編輯者が我々と可成りかけ離れた氣分の人であるといふことを思はせるのである。勿論アルペンカンデラーなどには寫眞の下に文句の刷込んだものもある。併し、あれは何處までも寫眞が主であり文句は従である。「山想日記」に至つては之が逆である。そんなに窮乏ならば日記だけ使つて文章を氣にしないがよい、といふことにならうがそれならば何も「山想日記」を買はないで他のあつさりしたものを使つた方がよいといふことになるし、毎日何とその日／＼の文章をよまないで好きな所を拾へばよいといふことになる、序でことに本全

體が山岳文粹である方が調法であるといふことになつて、何れにしても中途半端といふことになる。勿論、こんなことは多く個人々々の好みに依據して居り、必ずしも評者と立場を同じくしない人もあるかも知れない。併し、評者が今代表したやうな氣儘な人々も確に居るし、又山登りに可なり此の氣儘さが本質的に働いてゐるのではないであらうかと考へると此の日記は問題である。併し此の日記が澤山賣れて商賣としてよいならば強いてそれに水をさすやうな氣は持たない。たゞ萬一山岳人のために之の編集と發行の勞がなされるのならその勞は徒勞であると思ふ。

附録の「現代山岳人名簿」は登山家、旅行家、スキーヤー、山岳關係者合計二千三百四十五名の氏名と住所とを並べたものである。その勞や多とすべきであるが、此の名簿は「山想日記」の發行者がそのチラシを配布するに當つて利用した程に一般の人々には利用せられるとは思はれない。一定の會に籍を有する人々はその會の會員名簿をもつてゐるし、より近い友人は名簿なくとも知つてゐる。かといつて未知の人に何の用があつて誰が手紙などを出さうだらう多分此の名簿が出来た爲に迷惑をする人の方が多いだらうと思ふと、大體こんな名簿は全然必要であるし、かといつて百萬長者の番附ほどの愛嬌も茶氣もない名簿を造つて、頼みもしないのに人の名前や番地を並べることが編集者に許された自由なのであらうか、少くとも道德的には大

いに疑問であらう。要するに編纂者は内容にも此の名簿にも將又装幀にも新企劃を出して失敗してゐるのである。我々は寧ろよいもの、模倣の方をとる。(松方)

陸地測量部新刊目録

陸地測量部發行地圖目錄

五萬分一修正

札	五	當別
帶	十五	帶廣
夕	三	御影
宇	八	幸手
同	十六	寄居
高	十	東茂住
同	十二	高山
同	十四	白木峰
甲	十六	御岳昇仙峽
金	三	白川村

▲四合目大藏瀧小屋 收容五〇、設備完、一泊二圓二十錢、使用料五十錢、小屋番一月一日—二月十日迄在、但隨時同行、拒絕期間四月—六月、十一月、十二月、四合—五合目間の原野はスキーに適す。

▲六合目中小屋 收容五〇、設備完、一泊二圓、五人以上一圓五十錢、小屋番同行、積雪二尺五寸。

南アルプス

▲北澤長衛小屋 收容二〇、設備完、一泊一圓三十錢、一人は一圓五十錢、小屋番同行、積雪三尺。

▲第一屏風小屋 收容六〇、設備無、冬期使用者は所有者と折衝を要す。

▲駒ヶ岳六合目石室 設備無、使用同前。



會務報告

十二月一日定例理事會

- 出席 小島、高頭、木暮、島山、茨木、松方、角田、田中、中原、伊藤、椿、神谷
- 一、山小屋に關する報告 從來の山小屋委員會を改めて新委員會組織資金募集に就ては近々協議。
- 二、學生有志晚餐會の件 學生の會員が主となり晚餐會を開き親睦を計る件承認。
- 三、明年度より日曜圖書室を閉室す
- 四、豫算の件 原案通り可決。
- 五、新入會員會費延納の件 並に會員の家族入會に入會金免除の件は役員總會附議。

新着圖書

山川建述 文部省體育課
野球統制の話 著者
竹内亮述 著者
北九州の山と登山 著者
柳田國男著 秋風帖 梓書房
泉掬次郎著 スキー 大村書店
山小屋 十一月號 朋文堂
岳 第二號 岳社同人

龍 岳 第二期二號 山形龍岳會
かやと 第一輯 東京山嶺會
神戸突破嶺會十週年記念號
飛騨史壇 十月號 飛騨史談會
ベルク 十一月號 岡山山嶺會
せふり 第一二二號 福岡山の會
黒木立 第八〇號 關東岳愛會
跡 第九號 東京登山旅行會
雪 十一月號
東京アマチュアスキー俱樂部
友 十一月號 日本岳友會
アルカウ趣味 十一月號 日本アルカウ會
山行案内 十一月號
昭和三十二年十一月號
ベラスツリヤン 十一月號 關西徒步會
管見 第八四號 大阪管見社
藏前山岳部々報 十一月號
臺灣山岳會々報 十一月號
日本登高會々報 十一月號
東京みなかみ會々報 十一月號
明峰山岳會々報 十二月號
都島工業山岳會々報 六、七號
陸地測量部寫真帳 同 部
同年報昭和六年度 同
同 地圖目錄 同
Oxford and Cambridge Mountaineering 1928/1929
Cambridge Mountaineering 1932
The Mountaineer Vol. XXIV No. 12 Nov. 1932
The Prairie Club Bulletin No. 220 Nov. 1932
Bulletin Appalachian Mountain Club Vol. XXVI No. 2 Nov. 1932
Sierra Club Bulletin Vol. XXVII No. 5 Oct. 1932

Trail and Timberline No. 168/16 9 Oct/Nov. 1932
The Geographical Journal Vol. LX XX No. 4 Oct. 1932
La Montagne C. A. F. No. 242 Oct. 1932
Union Lépreux Excursionist Rassemblement Mensile Anno 19 No. 9/10 Sept./Oct. 1932
Revue Alpine Section Lyonnaise C. A. F. Vol. 33 No. 3 1932
Club Alpino Italiano Rivista Mensile Vol. LI No. 9 Sept. 1932
Bulletin del Centre Excursionista de Catalunya C. A. F. Any XII Num. 448/449 Sept./Oct. 1932
Bulletin del Centre Excursionista de la Comarca de Bages Any XX VIII No. 156 Agost-October 1932
Bulletin del Centre Excursionista Aliga Any II Num. 8 Nov.-Dec. 1932

山小屋委員會報告

▲十一月二十四日 午後五時虎の門圖書室、出席者、松方、渡邊、田中、角田、島山(委任)横、冠

特別出席 大野精七氏

缺席 武田、浦松

一、山小屋委員の改正

從來冷池候補地當時より組織せられたる委員會を今般理事の更迭、建設地變更、委員會の範圍擴大等の理由に因り左の通り、新たに委員決定す。(但昭和八年度)

角田、松方、渡邊、田中、今西、瓜生正

一、潤澤に建設すべき山小屋設計圖

及費用見積りは十二月初旬までに作成すべき旨、瓜生氏より報告あり。

一、資金募集は右報告を待ち、具體案を樹立すること。

一、次回委員會を十一月二十七日開催、委員會の範圍を擴大し、經驗と時間の餘裕ある會員及學生を召集の上、穂高潤澤の冬期狀態の調査及今後の經營管理方法につき協議をなすこと。

一、山小屋に關する會計は特別會計となす。

一、山小屋建設基金は現在三千圓あり。

▲十一月二十七日 正午より午後五時迄、虎の門圖書室

出席者 松方、田中、渡邊、角田、田口一郎、澤本辰雄、加藤泰安、鈴木恒、島田武時、清田清、國鹽研二郎、初見一雄、小川登喜男、本郷常幸、横尾直行、出牛陽太郎

一、松方委員會組織内容、今後の方針を説明出席者一同の援助を希望す。

一、角田山小屋建設に到る今日までの経過及び今後の豫定説明。

一、協議事項は主として潤澤の雪崩を中心とし、今冬潤澤に入る登山者に積雪量、風向、温度、雪崩の調査を依頼し、其報告を一月中迄に求める事とす。

一、潤澤を中心とせる寫眞を多方面より蒐集し、參考資料となす。

一、次回委員會は十二月初旬に開催今西氏の上京の上、雪崩調査の方針統一を計ること。及び管理經營の具體案を角田作成し、當日審議すること。

財團法人の件

右は山理事當局と折衝の結果一時取下げることとせり。

編輯後記

浦松佐美太郎氏の提案によつて生れ、そして非常なる努力によつて育まれて行つたこの會報も、今は三十一回の號数を數える事が出来た。今年一ケ年間は神谷氏と自分がこの仕事に當り會報をよりよくする爲に努力をつゞけて來た。

一九三三年度の會報は既に多額の豫算も決定し、毎號十二頁編輯の方針のもとに計劃はすゝめられてゐる。來年は新しい顔振れを以てより以上に組織のある、そして充實した會報を作り度いと希望してゐる。

今回の會報はこの意味に於ての試

みとして十二頁とした次第である。内容について御意見なり御希望なり多數寄せられん事をお願する。編輯に應援して下さいた馬渡務君の努力は感謝に堪えない。(角田)

料告廣 一六 半
段 圓 五十一
頁 圓 十三

昭和七年十二月十七日印刷
昭和七年十二月二十日發行

發行兼編輯印刷人 角田吉夫
東京市芝區芝平町一
不二屋ビル
發行所 日本山岳會
(所刷印社交和)

會報投稿規定

●投稿は會員たると否とを問はず自由です。

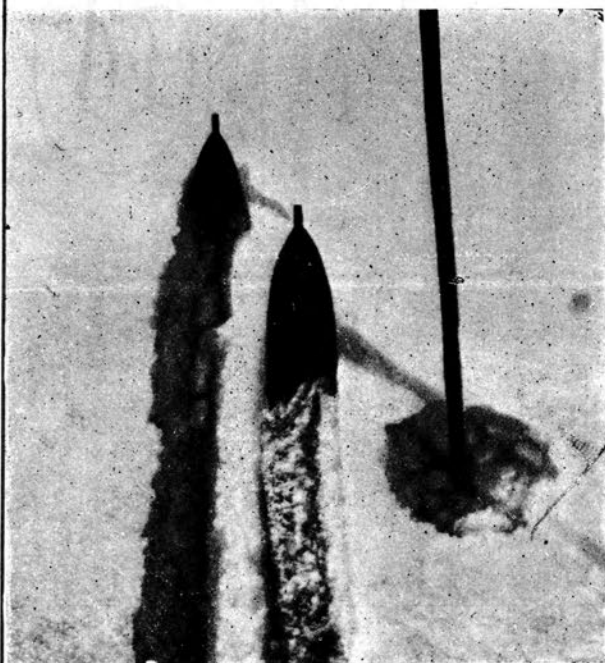
●山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息を御送り下さい(原稿は十六字詰のこと)

●原稿には成るべく寫眞及凸版其他材料の添付を願ひます。

●原稿は紙面の都合上、簡にして要を得たるものを希望します。

●原稿締切 毎月五日 原稿用紙は申込次第送ります。

●投稿は一切返戻致しません。



美滿津のスキー用具！

十一月廿日より陳列

純正アメリカン
ヒツコリー材
其他
イタヤ、アッシュ
等各種取揃へて
あります。

サイズ、様式
仕上に特別のお
好みある場合御
命令通り製作致
します。

合名會社
美滿津商店

東京・本郷赤門前
電話(小石川.85) 0845, 2071.

スキー用具品揃

Schenk
Häslar
Jörg
Hupfaut
東北帝大
(ニツケルクローム)

SKI
SKI SCHUHE
RUCKSACK

STEIGEISEN
SEILE
BERG SCHUHE

東京店開業小川町ビル二階(西口)

山とスキー具専門
好日山莊
大阪市北區堂ビル前大阪貯蓄三階
西岡一雄
東京市神田區小川町電停前小川町ビル二階
海野治良